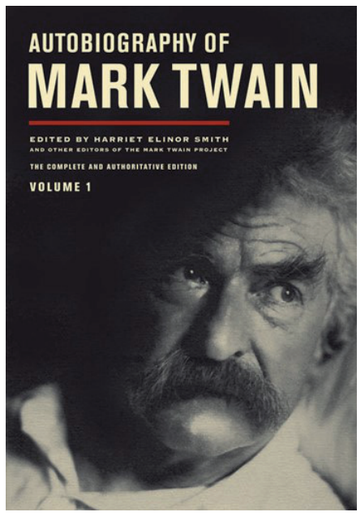
黙って話を聞く仕事
英米文学

私は主にアメリカ文学を研究していますが、仕事のほとんどは「黙って人の話を聞くこと」だと言っても過言ではありません。あたり前ですが、小説は質問をしても返事をしてくれません。こちらが何を言っているのか分からなくて途方に暮れていても、自分の言いたいことだけを言い続けてきます。それでもこちらは話を聞きます。だって面白いから。意味がわからないのに面白い。こういう作品に出会えた時、私は「やった」と思います。意味がわからないということは、その作品が自分にとって何かとても新しいことを言っているかもしれないからです。しかし、意味が分からないという感覚は容易に「つまらない」という感覚にも繋がります。「つまらない」というのはある種の防衛反応みたいなもので、理解できないということを作品のせいにしてしまおうというセコい気持ちの現れです。でも多くの場合、つまらないのは作品ではなく自分です。だから自分にとって新しい作品を読むということは、自分のつまらなさと正面から向き合うことでもあります。そこは面白くありません。それでも読みます。作品の面白さの理由が少しでも分かると、自分もまた少しだけ面白くなったような気がするからです。しばらく読んでいると、「わかったかも」という感覚が芽生えてきます。でもすぐにそれは幻想に過ぎないことを思い知らされます。小説は長く、考慮すべき要素がたくさんあります。詩は短く、手がかりが少ないため苦労します。どちらにしろ、「わかったと思ったら違った」ということをひたすら繰り返します。でもそうやって諦めずに耳を傾けていると、運が良ければ、それまで考えていた色んなことがパチっとハマって「わかった」と思える瞬間を迎えます。その瞬間、世界が少しだけ、でも決定的に違って見えることがあります。そういう経験を私は文学を読むことで繰り返してきました。英米文学研究が世界を変えることはほとんどありませんが、文学が誰かの世界を変えるきっかけになることはできると思います。私が文学を研究する理由の一つです。

衣川将介　准教授



アメリカ人作家マーク・トウェインの自伝全３巻（１巻目の表紙）。口述筆記で書かれた 2000 ページ以上に及ぶ１人語り。「黙って聞く」の限界が試されます。

大理石と写本（マニュスクリプト）のはざまで
西洋古典学

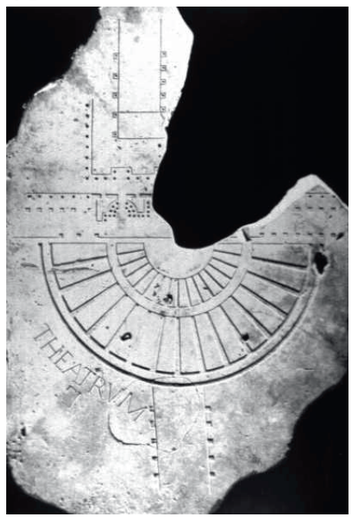
Forma Urbis Romae と呼ばれる、203-211 年頃に制作された都市ローマの大理石地図がある。この地図は、横 18.10 m、縦 13 mの大きさの物で、フォルム付近に建つ平和の神殿の内部の部屋の壁に架けられていたとされる。530 年に聖コスマスと聖ダミアヌス教会が神殿の隣に建つと、この壁は教会の後壁として転用され、その後は次第に地図が落下したり、再利用されたりするが、16 世紀にこれらは再発見された。この時、地図断片は紙に書き写されたが、その後も紛失するなどして、現在は 1186 断片が残る。

この夏、大理石地図とその内容を紙に書き写した 16 世紀後半の写本を見に調査に行った。最初に足を運んだのは、写本があるヴァチカン図書館。ヴァチカンの広場を横切り（偶然、教皇が見えた）、聖堂向かって右方向の入口に立つスイスの衛兵に写本を見に来たというと、通され、受付でパスポートの確認を受ける。その後、道に戻って西へ直進すると、右手に図書館が見える。図書館に入り、推薦状を図書館司書に手渡し、読者証が発行されると、ようやく荷物を預けられる。必要なものだけ持って保安検査を通り、エレベータに乗り、文系共同館 2A と 2B が合わさったほどの大きさの写本の部屋に進む。必要な写本を注文すると、しばらくして抱えるのに苦労するほどの大きさの本が出て来る。ここから調査がはじまる。

写本の性質を見極めるため全ての頁に目を通すと、目当ての箇所に戻ってメモを取り、スケッチしながら精査する。すると、大理石地図の写真を見るだけでは気づかなかったことに気が付く。その繰り返しをして図書館を後にした翌日、今年開館した大理石地図を展示している博物館 Museo della Forma Urbis に赴いた。ここでは、拡大された 1748 年刊行のローマ地図の上に該当する箇所の地図が並べられ、ガラス越しに現物を見ることができる。ここでも、写本が書き写し間違った点や、大理石の刻み方の違いなどに気が付く。

書籍や図像が手に入っても、データがデジタル化されていても、見えてこなかったものに気が付く。これこそが、実際に現物に手を取って調査をする理由であるように思う。

川本悠紀子　准教授



Forma Urbis Romae（ポンペイウスの劇場）©Wikimedia Commons

ローマの景観から考える歴史学
西洋史学

今日も、イタリアのローマ市街を歩くと約２０００年前の人々が作り上げた様々な景観を見ることが出来ます。ローマの玄関口テルミニ駅を出て南西に進むと、フラウィウス朝期に造成された有名なコロッセオがあり、そこから北西に進むと初代皇帝アウグストゥスにより壮大な景観を持った広場として企画され、歴代皇帝によって整備されていくこととなったフォロ・ロマーノがあります。これらの景観は一見して、当時地中海全域で威容を誇ったローマ帝国の姿そのものであるかのように豪壮なものです。

しかし、これらの遺跡はその後の時代を無傷で生き残ってきたわけではありません。例えばコロッセオは自然災害による損壊を受けてきたこともちろん、キリスト教全盛期の中世を通じてその建材を教会などの建築物に流用されてきたという来歴があります。かつてのローマ帝国の景観が後世のキリスト教の影響下にあることは疑いようのない事実で、今日ローマ帝国期の一連の遺跡群が『ローマの歴史地区と教皇領』として世界遺産登録されていることも当然でしょう。

キリスト教の影響を受けているのは歴史研究で用いられる史料に関しても同様です。私が研究対象としている皇帝マルクス・アウレリウスの治世に関して証言を残す、３世紀初めの元老院議員カッシウス・ディオの『ローマ史』の当該部分は、１１世紀の修道士の要約が残るのみで、キリスト教的な関心によって元の証言が歪められている箇所があります。このような史料状況は、ローマ帝国の状況を復元するという作業において少なからず障害となりますが、後世に追加されたフィルターを通じて一定の「事実」を抽出することが歴史学の面白さの一つと言えるかと思います。

佐藤力矢　博士前期課程１年

カピトリーノ美術館から見たフォロ・ロマーノ。セプティミウス・セウェルス帝の凱旋門の隣にはサンティ・ルカ・エ・マルティナ教会が見える

月刊
名大文学部
第142号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2024 年 11 月 10 日発行